

第1回 和光市立小・中学校の適正配置・適正規模等検討委員会 議事録（要点）

平成21年6月 4日

15:00～16:40

和光市役所502会議室

出席委員17名 欠席委員2名

教育委員会出席者

大久保教育長

田中教育部長

鈴木事務局次長兼学校教育課長

西学校教育課課長補佐兼指導主事

委員長・副委員長の選出

委員長：狩野 浩二（選出区分 学識経験者）

副委員長：吉田 武司（選出区分 地域団体関係者）

協議（：委員の主な発言：事務局の回答の概要）

諮問の中に、中・長期的な視点から、小・中一貫教育という文言も入っているが、小・中一貫校は話し合いの前提としなくてもよいのか。

教育委員会の話し合いの中では小・中一貫校の設置についても意見が出されている。今回の検討委員会の話し合いの結果、そういった方向性が出されることもありうると思う。

本年4月から実施した学校選択制の効果について提示してほしい。

小学校入学に際し選択制を利用して指定校を変更した児童は計5名である。第二中学校へは、選択制を利用して27名が進学している。このうち21名は大和中学校区からの指定校変更である。選択制を実施した結果、大和中学校の1年生は1学級あたり3名減少した。また、第二中学校では1学級増となり、学校選択制の効果は十分に上がっていると考えている。

本日は、第1回目の検討委員会なので、委員の方々から自由に意見を出していただきたい。

新倉小は伝統ある学校であり、現在は教室数にも余裕がある。従来、学校が文化の中心であったが、近年学校の周りの状況は大きく変化している。社会増は予想できない。市内学校の学校間格差は大きいのではないかと。新学習指導要領では、算数、理科が重視されているが、白子小を考えると5・6年生の理科の授業を実施するだけで、理科室は一週間予定がいっぱいになってしまい、4年生以下は使用することができなくなる。学校をつくることも大切であるが、充実した教育をするための施設にも目を向けることが重要だ。大規模学校は1学級が週1回しか使えないが、小規模学校は週2回使えるコンピュータ室はよい例ではないか。東上線の北側に3つの小学校しかない現状はやはり課題がある。十分に検討し、更に教育環境の適正化を図っ

ていけるとよい。

学校には適正規模がある。教室数が20あるから20学級あってよいという訳にはいかないだろう。適正規模について資料をいただけるとよい。また、諮問に小・中一貫教育、バス通学について議論されたとあるが、どのような議論がされたのか内容が知りたい。

白子小では5月23日に運動会が行われた。防犯のためにネームストラップを用意したが、1500人位の参観者がいて、不足してしまった。保護者席も基本的にはない状況である。昨年も給食室工事のため子どもたちの遊び場がなかった。子どもの数も多い。設備も古くなってきているし、余裕教室もあまりない。学校としての標準モデルを基本に考えることが大切だろう。また、板橋区への越境児童も多い。和光の子どもが行きたがる魅力ある学校にしていきたい。新倉小は児童数に対して教室数は十分であると考え。平成17年度の通学区域の変更を行ったが、700名弱の児童がいる。しかし、谷中地区の区画整理が進めば、北原・新倉学区の児童が増加し、学区を戻す話も出てくるのではないかと。学区変更は地域の分断にもつながるので、学区の変更がたびたび起こらないような配慮をしていきたい。

北原小学校には、学校まで30分以上かけて通学する子どももいる。しかし、遠くても自分の学校は大好きだ。大人の都合で子どもたちがあちらこちらの学校に行かなければならなくなるのはかわいそうだ。

子どもにとっては学校がすべての社会である。広い校区は子どもが散らばってしまう。保護者も子どもたちの生活や学校に対して視点を広げなければならないので、具体的な様子が見えなくなってしまう。

選択制を利用して第二中学校まで通学している生徒がいる。通学距離はかなりあり、通学路にも暗がりがあるので、心配な面もある。しかし、子どもは楽しんで通学している。学校生活への満足度には通学距離は関係ないように感じる。新倉地区には、若い子どもが多い地域もある。今後、新倉小も児童数は増加すると思う。新設校の設置にあたっては、将来お年寄りに利用してもらえるように教室等の配置をかえていけるような施設を検討できるとよい。

今後の和光の教育を考える上でも、学校の適正規模を含めて和光の子どもたちがこうなってほしいという方向を教育委員会が出してほしい。大人の都合が優先されてしまうのではなく、どういう教育が受けられるべきかを話し合う必要がある。運動会という行事ひとつをとってみても大規模校と小規模校では状況が違う。全国的には小規模校が多く、デメリットについてもまとめられてきている。市内の小規模校についても検討したい。

従来は通学区域を当たり前のこととして考え指定校へ入学してきた。しかし、和光市の状況は、外環道の開通、地下鉄の乗り入れ、北口開発と進められてきており、学校の問題が後追いになっている。学校建設には、お金も必要だが、子どもたちはいつまでも待つことはできない。肉体的、精神的負担をかけさせたくない。一部の学校の児童生徒数の増加は切羽つまっているのだから、既存施設の中でもできることがあるのかもしれない。知恵を出して、検討したい。

白子小の敷地の幅はできない。このままの状態では、適正規模化は難しい。白子小の学区は北側は新河岸川まであり、通学距離や防犯の面でも課題がある。白子小については収容児童数

も限界であり、現在の状況は不適正配置といわざるをえない。

適正規模とは何か、設置基準を下回らないようにすることなのか、最低基準として考えるのか。市の考えを聞きたい。

小・中連携校を設置するにしても、施設やカリキュラムの課題がある。

児童生徒の送迎についても考える必要がある。

市内の学校の児童生徒数を考えると均衡がとれていない状況がある。第三小を例にとると昭和40年代以降児童数は増加し、その後減少に転じ、近年増加している。北口の人口増を読める資料はない。区域外就学者の数ははっきりしている。魅力ある学校づくりにはある程度のゆとりが必要である。

市内の新設校は昭和58年の本町小が最後となっている。当時は4学級並行の学校を想定して設置されている。当時と比較すると、少人数指導等指導形態が変化している。1～6学年まで24学級と考え、プラス分の教室数を考えた施設を考えておかないと学校の適正化はできない。国の基準をそのまま和光市の基準として考えてよいのか検討したい。

小・中一貫校を設置するにしても、どういう学校がよいのか検討が必要だろう。小・中学校の分離型がよいのか統合型がよいのかという課題もある。

児童のバスの送迎についても検討したい。白子小は児童数約800人、本町小は児童数約200人である。教育委員会としての考えも伺いたい。

区域外就学者がすべて小学校に就学していると考え、市内の小学校はパンク状態になっていることが想定される。北口の学校のあり方について検討したい。

中・長期の展望がある程度必要だろう。第四次基本構想に学校についても組み込みたい。5年・10年のスパンで考えていくことが必要だろう。首長部局との調整も必要である。

農地の調整区域が外れる見通しによって開発はすすんで行く。調整区域が外れるかどうかの情報ほしい。

市の南側の部分の開発がこれまで優先されてきているのは事実である。今後も市内小・中学校の配置は現状どおりでよいのかということも考えていただきたい。学校数を変えないで、配置を替えることもひとつの考えである。児童ひとりあたりの保有面積や校地面積を勘案した各学校の学級数の検討も必要である。既存の建物についての見直しも必要であろう。理科室等特別教室は各学校1教室しか設置されていない。更に、備品数の問題もある。特別教室を設けることは施設を変更することにもつながっていく。今後、委員の皆様にもさまざまな角度からご審議いただきたい。